

## 基地都市コザにおける照屋「黒人街」の商業環境

—関連店舗の立地復原から—

加藤 政 洋\*

ゆるやかな照屋の坂を上ってゆくと、道の両サイドは、Aサイン酒場でいっぱいだった。夜光虫のようなネオンが出ていて、軒並み、ジェームス ブラウンJ・Bが流れてきた<sup>1)</sup>。

### I. はじめに

#### 1. 研究の目的

都市社会地理学の教科書として定評のあるP・ノックスとS・ピンチの共著『都市社会地理学』は<sup>2)</sup>、その冒頭でJ・ラバンのポストンに関する文章を引用するところからはじまる。

……なぜイタリア人たちはノース・エンドの高速道路の後ろにぎっしり蟻集しているのだろうか？ なぜニグロはロックスバリーに、ユダヤ人はチェルシーに住むのか？ ポストンの郊外はいずれも似たりよったりだ。古風な魅力をたたえ、おつにすまして、一見退屈そう。それなのに、なぜ、窮屈に線引きされたゲッターに変わっ

ていくのだろうか？ というのも、そこはまるでこんなふうにおもわれるからなのだ。すなわち、誰かが地図をとりだして、その地勢にまったく明るくないにもかかわらず、ここは「ブラック」、ここは「ユダヤ人」、さらに「アイルランド人」、「アカデミック」、「上流」、「イタリア人」、「中国人」、「その他」と銘打って、それぞれ不定形な塊りに色分けしていった、と<sup>3)</sup>。

ノックスとピンチが、都市構造を理解するための第一歩を、空間分化 spatial segregationの過程と要因の解明に見いだしていたことは明らかである。知られるように、こうした問いはシカゴ学派 (E・バージェス) の提唱した同心円モデル、あるいは若き日のエンゲルスによるマンチェスターの観察にまでさかのぼることができるだろう<sup>4)</sup>。

都市空間にはじつにさまざまな分化の形態を見いだすことができるけれども、都市社会地理学で注目を集めてきたのは、主として居住分化であった。オーソドックスな同心円モデルにもとづく考察から、GISを用いた精緻

\* 立命館大学文学部

キーワード：沖縄、基地、コザ、「黒人街」、歓楽街

Key words：Post-war Okinawa, Military Air-base, Koza, 'Black-area', Entertainment District

な地区分析にいたるまで、現在でも研究成果がうみだされつづけている<sup>5)</sup>。

先行する研究の問題関心と成果をふまえて、本稿では別様の空間分化に焦点をあわせてみたい。それは、戦後沖縄を表象する基地都市コザ（現・沖縄市）における消費空間の人種的分化である。

戦後、米軍の占領（統治）下に置かれた沖縄島では、1950年代の初頭から、中部を中心に恒久的な基地の建設が進められた。広大な土地を排他的に占有して建設された軍事基地は、従前の土地利用、そこで営まれてきた暮らしを暴力的に疎外すると同時に、あらゆる（再）生産・消費を外部的化することから、駐留する軍隊の人口規模に応じて、基地の周囲ではなかば不可抗力的に都市化が引き起こされる。占領／統治下の沖縄に投企された基地の外部依存性は、強力な駆動因となって、その周囲に都市的な空間を編制したのである。

全長 3,700 m の滑走路 2 本を備えた極東最大のアメリカ空軍基地（総面積約 20 km<sup>2</sup>）である嘉手納基地（Kadena Air Base）は、1943年9月から日本陸軍航空本部によって建設された飛行場を、米軍が1945年の上陸後に接収して拡張・強化し、現在に至る。基地の領域は沖縄市・嘉手納町・北谷町という1市2町にまたがり、滑走路・駐機場・格納庫といった軍事施設が主として嘉手納・北谷側に立地する一方、沖縄市側には兵舎や家族住宅など、軍人・軍属の生活空間が築かれた。

嘉手納基地内部の土地利用が空間的に分割された結果、生活空間に接する旧コザの市域全体、なかんずくゲートに通ずる幹線道路とその一帯が、巨大かつ特異な門前町をかたちづくるところとなった。コザの市街地は国道330号（旧軍道15号線・24号線）の沿道に

形成されており、おおむね山里三叉路から諸見まで、胡屋十字路、そしてコザ十字路を中心とする商業ブロックに分かれている（第1図）。これらの商業地区は、いずれも1950年代初頭の基地建設に随伴して形成されたものにほかならない。

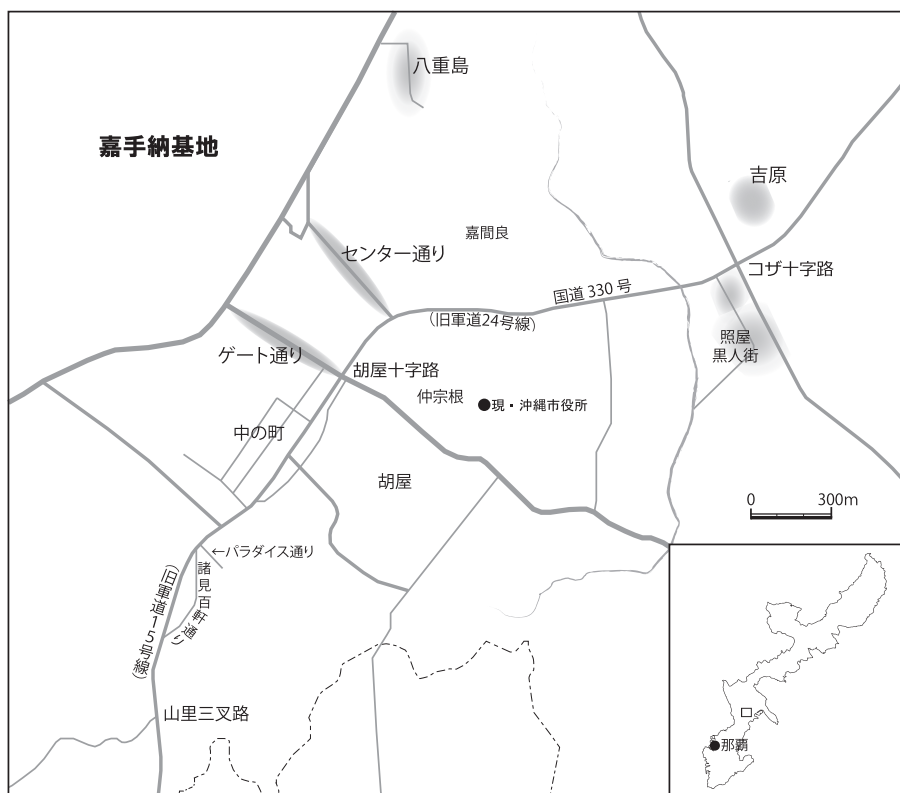
ここで注目すべきは、市街地にブロックをなして点在する商業地区が、人種的な色合いをもって、はっきりと空間分化していたことである。直截に言えば、白人の遊興する歓楽街と黒人のそれとが分離していたのだ。

一般に地理学で「黒人街（black areas）」といえば、居住分化の人種的な次元を意味する。ところが、米軍統治下の当時、「黒人街」と称されていたのは、黒人兵が余暇を利用して出入りする商業地区なのであった。「白人街」については、本稿と同じ手法（後述）をもって論じたことがあるので<sup>6)</sup>、ここでは「黒人街」の商業環境の復原に取り組むこととする。

具体的には、照屋「黒人街」と通称された歓楽街について、1970年8月時点で立地した事業所を図と表で復原する。そのうえで、集積の度合いの高い業種の特性について考察をくわえ、空間的な特色を明らかにしてみたい。

## 2. 基地経済と商業

当時、コザ市の総面積約 24 km<sup>2</sup>のうち、その約 67%が米軍基地の用地として接収されていた。大規模な土地接収の空間的な帰結は、ふたつの現象面としてシンプルにとらえることができる。すなわち、本来は基幹産業となるべき農業の土地利用が大幅に制限されること、そして過密な市街地の形成である。あらゆる部面を外部に依存する基地の空間性は、サービス業に特化した都市編制を生産する。



第1図 コザにおける商業地区の分布

第1表は、基地関連収入の概算をまとめたものである。財・サービスの提供が全体の73.7%を占め、軍雇用員の給与が23.5%、そして軍用地料が2.8%であった。たとえば復帰当時のコザ市の「経済は80%以上を基地経済に依存し、特に嘉手納基地の米軍人、軍属、民間人2万8千人に負うところが大きい」というので(『琉球新報』1972年6月22日)、単純に計算しただけでも域内総生産の約6割を、米軍向けの財・サービスの提供が占めていたことになる。

「理髪店、洋服店、レストラン、ベッド製作所など、コザ市では何一つ基地に依存しないサービス業はみあたらない」というように、「戦後十五カ年の間に基地経済は生活のすみ

ずみまで浸透してしまった」(『琉球新報』1961年1月9日)。

第1表は1店舗当たりの売上げの高い業種順に上から並べているが、「スーベニア」(土産品店)や質店・時計店にくわえて、「Aサイン」と称される米軍の許可を受けたクラブ・バー・レストランが上位を占めている。衣類・靴の製造販売、理容・美容といったサービス業など、ファッション関連産業も重要であった。

では、このようなコザ全体の状況は、各商業地においてどのように具現したのであろうか。Ⅱで事業所立地の復元方法を整理したのち、Ⅲでは実際に「黒人街」の商業環境を復元し、その空間的特色を考察する。

第1表 「基地関連収入」の概算（年間）

| 業種         | 軒数    | 年間収入（ドル）   | 1軒平均（ドル） |
|------------|-------|------------|----------|
| スーパー       | 24    | 1,090,000  | 45,417   |
| Aサインパー     | 239   | 8,570,000  | 35,858   |
| 質屋         | 44    | 1,430,000  | 32,500   |
| Aサインレストラン  | 55    | 1,430,000  | 26,000   |
| 時計店        | 27    | 490,000    | 18,148   |
| ホテル        | 154   | 2,270,000  | 14,740   |
| アパート／マンション | 150   | 1,730,000  | 11,533   |
| タクシー業      | 66    | 720,000    | 10,909   |
| 洋服小売業      | 115   | 950,000    | 8,261    |
| 衣服製造業      | 223   | 1,230,000  | 5,516    |
| 賃貸住宅業      | 278   | 1,270,000  | 4,568    |
| 理容業        | 125   | 520,000    | 4,160    |
| 靴店         | 26    | 50,000     | 1,923    |
| 美容業        | 175   | 260,000    | 1,486    |
| 写真業        | 30    | 40,000     | 1,333    |
| その他        | 1,971 | 2,840,000  | 1,441    |
| 小計         | 3,702 | 24,890,000 | 6,723    |

出典：『琉球新報』1971年1月5日

\* 復帰対策委員会事務局の推計（1969年5月）。

\*\* 「Aサイン」は軍人・軍属の立ち入りが許可された店舗。

## II. 資料と方法

### 1. 「事業所基本調査」の利用

本研究で基本資料とするのは、『事業所基本調査調査票』（コザ市、7分冊、1970年）ならびに『事業所基本調査事業所調査票』（コザ市、7分冊、1970年）である（沖縄県公文書館蔵）。前者には、琉球政府企画局統計庁が1970年8月に実施した「事業所基本調査」の「調査区要図」と「調査対象名簿」とが含まれる。

手書きの地図である「調査区要図」には、事業所の位置を示す番号が書き込まれており、それらは「調査対象名簿」に記載された番号と符合するので、各事業所の立地をある程度まで把握することができる。「調査対象名簿」には、事業所名、事業主名、所在地、事業の種類、経営組織、本所・支所の別、常

用雇用者数などが記されている。

他方、後者の『事業所基本調査事業所調査票』は、「事業所基本調査」の実際の個票を7冊に分けて綴ったものである。内容は『事業所基本調査調査票』の情報にくわえて、事業主の国籍のほか、営業種目（商品・サービスなど）の上位3点、開設時期、販売先などが記されている。なかでも注目されるのは、「販売先」である。この欄は、「沖縄内・観光客・外人」の3つに区分されており、これによって外国人の顧客率を知ることができる。当時の外国人は、軍人・軍属がほとんどであるから、基地経済の実態を知るうえで、資料価値は高い。

### 2. 「黒人街」を表象する記号と業種

沖縄を特集した『週刊アンボ』第10号（1970年3月）には、「コザ市照屋区『黒人街』略図」と題する地図が掲載されている<sup>7)</sup>。この図は、

第2表 『週刊アンボ』の略図における記載件数

| 業種       | 内訳         | 件数  |
|----------|------------|-----|
| 衣料品店     | 仕立・小売 (☞)  | 45  |
|          | 刺繍         | 1   |
|          | (製)靴       | 2   |
| 飲食店      | クラブ・バー (☞) | 29  |
|          | レストラン (☞)  | 9   |
|          | 軽食         | 7   |
| 宿泊業      | 売春宿 (☞)    | 28  |
|          | ホテル (☞)    | 21  |
| 理容店      |            | 9   |
| 美容店      |            | 5   |
| 雑貨店・食料品店 |            | 12  |
| その他      |            | 21  |
| 合計       |            | 189 |

\* ( ) 内の記号は原図にもとづく。

記事と記事のあいだに唐突に挿入され、説明はいっさいなされていない。発行は1970年3月であるものの、その他の記事の取材時期を考えると、1970年初頭の状況を反映したものであると思われる。

図には、左右逆の奇妙な方位記号が付されているものの、南北は逆である（つまり、図の上方が南）。当該地区を知る者ならば、南北を間違えることはなかろう。つまり、製図者は実際の照屋を知らない可能性が高い。

ところが、記載された店舗情報は驚くほど詳しく、現地に精通した者でしか知りえない情報——たとえば、「☞」（ドクロ）の記号で表象される「売春宿」など——まで、盛り込まれている。この略図に記載された情報を整理したのが、第2表である。著作権の関係で原図を掲載することはできないが、この表によって、「黒人街」を構成（表象）する主要な業種が明確となるはずだ。

### 3. 立地の復原

本稿では、まず7冊に分けられた個票3,443

件をデータベース化した後、所在地が「照屋」の範囲に含まれる事業所データを整理した（527件）。そこから、『事業所基本調査調査票』の「調査区要図」と「調査対象名簿」を参照しつつ、まず事業所の立地をおおまかに復原する。その際、上記『週刊アンボ』の「コザ市照屋区『黒人街』略図」も参考にしている。とくに「☞」で示された「売春宿」は、この図に依拠しつつ、現存する建物については現地で確認した。

「調査区要図」の書き込みは、街区の大きさ、事業所間の距離が実態を反映していないなど、必ずしも正確ではない難点がある。そのため、立地の確定にあたっては、沖縄住宅地図出版社『ゼンリンの住宅地図 コザ市・嘉手納村』（1970年）を参照した<sup>8)</sup>。また、補助資料として、沖縄慶文社『コザ市（美里）住宅地図』（1968年）と『ゼンリンの住宅地図 沖縄市・北谷村 昭和51年版』も用いて<sup>9)</sup>、位置関係を推定している。

以上の手順を踏んで作成したのが、後掲の第2図である。

## III. 照屋「黒人街」の商業環境

### 1. 照屋の変遷

照屋の位置するコザ十字路は、沖縄島中部の交通の要衝であり、戦後、いちやく市場が開設されるなど、市内きっての商業地区に成長した。1950年代初頭から黒人兵の出入りがはじまり、関連するサービス業の集積が急速に進む。そして、地元向けの消費施設の立地と黒人兵向けのそれとは明確に分化し、まさに「黒人街」と呼ぶにふさわしい商業地区が成立するのである。

『沖縄風土記全集 第三巻 コザ市編』に

よると、1950年頃から「旧字跡や東町を中心に外人相手の飲食店などが建ち、十三号線沿いに移住者がふえはじめた」といい、さらに1951年になると「十字路市場が創設され、翌年には池原幸長氏を中心にして、本町通りの中通りの都計が行なわれた」<sup>10)</sup>。実際、『コザ 照屋 1965』によると、1952年5月に「地主の池原幸長氏が主体になって地主が協働して越来村当局の指導の下に都計がなされ、当地域の基礎を築いた」、また1953年7月に「十字路オリオン劇場と第一セントラル琉映館が開館され、当地域の発展が約束された」<sup>11)</sup>という。

拙著『那覇 戦後の都市復興と歓楽街』で指摘したように、戦後沖縄における都市形成は、「市場・劇場（映画館）・歓楽街」という空間的3点セットを核としていた<sup>12)</sup>。照屋における中心性もまた、この空間性によって具現されていたことになる。

都市化初期のコザ十字路を知る上で、「戦後派地帯を衝く」と題された『琉球新報』(1951年6月11日)の記事が参考になる。「触手ある小店街 かじまやあメリケン道路 宮里十字路」と見出しの付けられたこの記事では、「越来美里両村が接する界、俗称宮里カジマヤ<sup>マ</sup>ー<sup>ー</sup>帯」の殷賑ぶりが以下のように伝えられた。

すなわち、十字路からコザ高校方面へ向かう道路は、「昨年あたりまで……ほとんど畑」であったものの、両側におよそ百軒の家屋が建ち並んで、地元では「メリケン道路」と呼ばれるようになった。さらに、十字路から石川方面に向かう道路にも同じく家並が連なり、まるで十字路が「触手を伸ばして一つの隣接町を形つくつて」いるように思われるほどの発展ぶりを示していたのである。

そして、家屋の「大部が飲食店まがいの小

店、店先にはテーブル、椅子が置かれて、黒人さんがアイスクーキを若い娘さんと隣合っているのも今では月並の風景」であったという。わざわざ「黒人さんが」と記しているところをみると、店舗土地の進んだ最初期から目立つ存在だったのだろう。

また、「十三号線と瑞慶覧天願線との交差点であるコザ十字路には〔、〕ひと頃は、見すばらしいパンパン小屋が二三あつたに過ぎないが、この頃では、あの十字路を中心に、一寸した宿場町ぐらいには、家並が建て列になつている」(『沖縄タイムス』1951年3月15日)と報じられているとおり、当時、この十字路はすでに「コザ十字路」と呼ばれていた。

コザ十字路を考える上で、もうひとつ重要な点がある。それは、「……良く話にきく白ライン、黒ライン」、すなわち「肌の色具合によつてはつきりと遊ぶ場所が区画され、この不文律でお相手を務める彼女等も、一応白相手、黒相手といったレッテルを貼りつけられるようになっていたわけ、全くどこかの租界地みたいな話」(『沖縄タイムス』1951年3月15日)として説明される、人種的な空間分化である。

ちよつと区域で示すと、まずセンター区と裏街の八重島が白人街、胡差十字路から胡差高校間が黒人街、同十字路から美里村役場方面並に天願方向が共同街（といつても白人を主としている）、越来村役場一帯が比島人さん相手のハーニーさん達のお住居街といつたところ、従つて白人さんが好きな娘がいるからといつて黒人街に顔を出そうものなら一べんにやつつけられて蛙のようになりうちのめされてしまうし、その逆もま

た全く同様、白人街の店が黒人さんを招くようなものなら忽ちポイコットされてしまうことうけ合い、ということになるのだそうだ。(『沖縄タイムス』1953年10月16日)

十字路が小中心地としての性格を強めてゆくのにあわせて、白人と黒人の空間分化が明確となった<sup>13)</sup>。

## 2. 市場・映画館・歓楽街

IIで検討した手順にもとづき作成したのが第2図である。オレンジ色で示した建物は、米軍によって関係者の出入りが許可された「Aサイン」の飲食店にあたる。同じくピンク色の建物は、ホテルや旅館などの宿泊施設を示す。「コザ市照屋区『黒人街』略図」では、いわゆる「温泉マーク (♨)」で表示されているので、そのほとんどが「連れ込み宿」ないしラブホテルであったとみてよい。

一見して明らかなとおり、照屋地区は映画館Y・Zの面する東西の道路を境界線として、南北にはっきりと分割される。

沖縄住民向けの商業地である北側は、本町通りの商店街を軸線に、東側の核となる十字路市場と、西側の十字路社交街から構成される。

十字路市場のはじまりは、1951年、「伊礼清有氏・内間安德氏・崎原正松氏の三人が田圃を埋立て、カバ家の長家を二棟建て、十字路市場を創立した」ことにはじまる<sup>14)</sup>。翌1952年5月には、業者17名をもって市場組合が結成された。同じく1952年には、地主が中心となって後の「本町通り」を基軸とした土地区画整理を実施し、商業地の基盤が形成されている。

そして、市場を取り巻くように映画館も次々と開館する。軍道24号線を挟んだ北側

まで含めると、5つもの映画館が立地した。すなわち、軍道北側のコザロキシー(V [旧・沖映館、1952年開館])と十字路国映館(W [1958年開館])、比謝川に近いコザ琉映館(X [1960年開館])、そして本町通りを挟んで対面する十字路オリオン座(Y [1953年開館])と第一セントラル琉映館(Z [1953年開館])である<sup>15)</sup>。

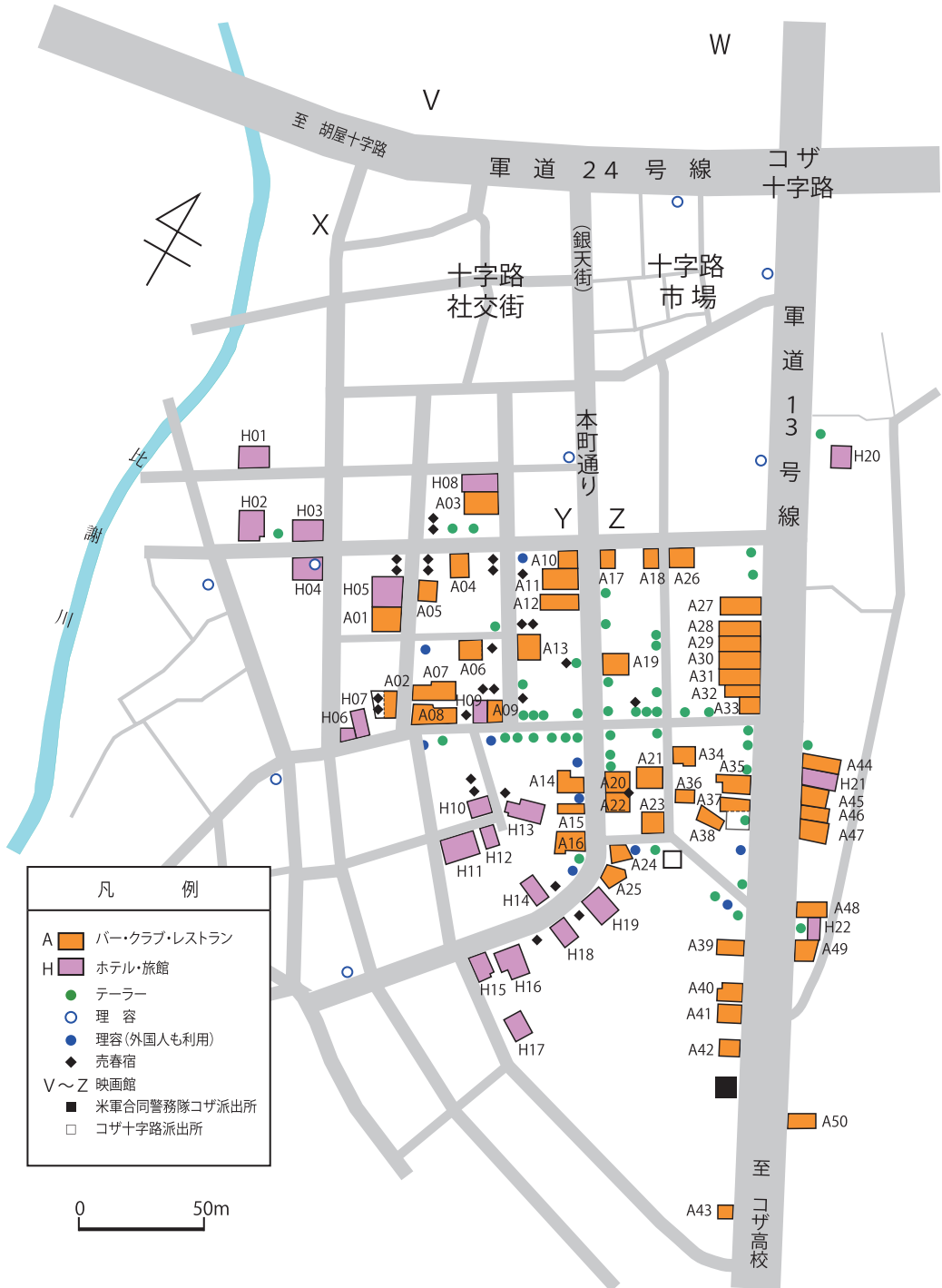
なお、十字路オリオン座は1969年2月に一階部分をマーケットに改築し、客席(241席)は二階のみになっていたためか、『週刊アンボ』掲載の『「黒人街」略図』からは欠落している。

十字路社交街の成立はやや遅れたようで、カフェーなどの風俗営業系飲食店のほとんどが、1960年代後半に開業した。

## 3. Aサイン店舗とホテル、そしてファッション

以上のように、軍道24号線に近い本町通りの東西は地元住民の消費空間として構築された一方、その南側には黒人の選好する業種の集積した歓楽街が形成された。あらためて「コザ市照屋区『黒人街』略図」にもとづいて繰り返すならば(第2表)、「黒人街」を表象する業種は、衣料品店——主として洋服を仕立てるテーラー——、バーをはじめとする風俗営業系(Aサイン)の飲食店、そして「売春宿」とホテルである(第2図・第3表・第4表)。

まず、飲食店の立地展開についてみると、1950年後半から「旧部落や東町を中心に米軍人を相手に商売をする方々が各地から移住して新橋通りに住家が建つようになった」という記録が残っている<sup>16)</sup>。「新橋通り」とは軍道13号線を、そして「東町」とはこの通りに近い照屋地区東部の街区を指すので、幹



第 2 図 「黒人街」の店舗立地



第3表 照屋「黒人街」の飲食店

| No. | 店舗             | 業種         | 設立年  | 外国人顧客率 (%) |
|-----|----------------|------------|------|------------|
| A01 | クラブオリンピック      | カフェー       | 1964 | 100        |
| A02 | レストラン ジョーター    | レストラン      | 1965 | 100        |
| A03 | カフェーダイアナ       | カフェー       | 1961 | 100        |
| A04 | セブンレストラン       | レストラン      | 1963 | 100        |
| A05 |                | 飲食店        | 1969 | 100        |
| A06 | セブンスター         | カフェー       | 1964 | 100        |
| A07 | いろは            | カフェー       | 1964 | 100        |
| A08 | 月見             | カフェー       | 1960 | 100        |
| A09 | 青柳             | カフェー       | 1968 | 100        |
| A10 | チャームレストラン      | レストラン      | 1966 | 100        |
| A11 | キャバレーさかい       | カフェー       | 1965 | 100        |
| A12 | ダッチレストラン       | レストラン      | 1955 | 100        |
| A13 | チキン屋           | 飲食店        | 1969 | 100        |
| A14 | キャバレークラカバナ     | キャバレー      | 1956 | 100        |
| A15 |                | サンドイッチシャープ | 1969 | 100        |
| A16 | クラブ US         | クラブ        | 1957 | 100        |
| A17 | LOBBY          | レストラン      | 1963 | 100        |
| A18 | BAR TROPICANA  | バー         | 1964 | 100        |
| A19 | BABY TIGER     | カフェー       | 1963 | 100        |
| A20 | MARIMO         | バー         | 1963 | 100        |
| A21 | OREGON         | バー         | 1965 | 100        |
| A22 | KONAN          | バー         | 1963 | 100        |
| A23 | CAROLINA       | バー         | 1964 | 80         |
| A24 | THREE CORNER   | バー         | 1968 | 100        |
| A25 | KAZU           | バー         | 1967 | 100        |
| A26 | COUNTRY        | バー         | 1964 | 100        |
| A27 | PLOVER         | バー         | 1957 | 100        |
| A28 | OHIO           | バー         | 1960 | 100        |
| A29 | GINZA          | バー         | 1960 | 100        |
| A30 | GUYS & DOLLS   | バー         | 1969 | 100        |
| A31 | TOMODACHI      | バー         | 1963 | 100        |
| A32 | 777            | バー         | 1969 | 100        |
| A33 | US             | バー         | 1960 | 100        |
| A34 | HAPPY          | レストラン      | 1952 | 100        |
| A35 | NEW MOON       | バー         | 1957 | 100        |
| A36 | FRIEND         | BAR        | 1967 | 100        |
| A37 | HONEY          | バー         | 1956 | 100        |
| A38 | ELITE          | バー         | 1966 | 100        |
| A39 | FOUR CORNER    | バー         | 1970 | 100        |
| A40 | ENJOY          | バー         | 1965 | 100        |
| A41 | サロン・リーリー       | サロン        | 1963 | 100        |
| A42 | バーアボロ          | バー         | 1963 | 100        |
| A43 | BAR WASHINGTON | バー         | 1953 | 100        |
| A44 | BAR NEWORLEANS | バー         | 1962 | 100        |
| A45 | クイーンレストラン      | レストラン      | 1963 | 99         |
| A46 | BAR OLIENTAL   | バー         | 1963 | 100        |
| A46 | BAR BIRD RAND  | バー         | 1965 | 100        |
| 地図外 | レストラン オリーブ     | レストラン      | 1966 | 100        |

第4表 照屋「黒人街」のホテル

| No. | 店舗          | 設立年  | 外国人<br>顧客率(%) |
|-----|-------------|------|---------------|
| H01 | ユニオンホテル     | 1968 | 100           |
| H02 | きよみホテル      | 1959 | 100           |
| H03 | 美山ホテル       | 1967 | 100           |
| H04 | ホテル・リトルハーレム | 1968 | 100           |
| H05 | ホリデーホテル     | 1968 | 100           |
| H06 | エレガントホテル    | 1970 | 100           |
| H07 | クラウンホテル     | 1970 | 100           |
| H08 | ホテルさかえ      | 1967 | 100           |
| H09 | ナイスホテル      | 1969 | 100           |
| H10 | ホテル吉美       | 1970 | 100           |
| H11 | ハマベホテル      | 1968 | 100           |
| H12 | パールホテル      | 1970 | 100           |
| H13 | ホテルプリンス     | 1970 | 100           |
| H14 | ホテル本町       | 1970 | 100           |
| H15 | ホテルマイアミ     | 1970 | 100           |
| H16 | 旅館まつ家       | 1965 | 100           |
| H17 | MATSUMI     | 1968 | 100           |
| H18 | ラッキー        | 1966 | 100           |
| H19 | えびす旅館       | 1957 | 100           |
| H20 | LINE HOTEL  | 1966 | 90            |
| H21 | 江の島ホテル      | 1965 | 100           |
| H22 | 丸徳ホテル       | 1966 | 100           |
| 地図外 | オリーブホテル     | 1966 | 100           |

線道路の沿線から西方へと展開していったことになる。

最初期に立地の進んだ軍道13号の沿線は、交通繁華な街路に面しながら、黒人兵ばかりを客とする特異な歓楽街となった。表通りに風俗営業系の飲食店がこれほどの規模で集積する例は、白人街であるゲート通りとここのほかには見られない。これら飲食店全48件のうち46件までもが外国人顧客率100%——そして残り2件も99%・80%と高率——である。

飲食店の集積地を取り巻いて、北西から南の縁辺をなぞるようにホテル・旅館業が立地した。コザにおける宿泊業の立地展開と集積は、ヴェトナム戦争期に急激に進行し、なかでも照屋は他地区に類をみない規模の集積となっている<sup>17)</sup>。「コザ市照屋区『黒人街』略

図」には「㊦」で示されていることから、いずれも「連れ込み宿」としての性格を有していたものと思われ、「売春宿」との近接性も高い。

ここで詳細な分析はできないけれども、まるで「黒人街」を縁取るようなホテルの立地は、地形とも関係しているかもしれない。本町通りは南の高台へつづく坂道となっており、「ラッキー」(H18)や「えびす旅館」(H19)などは坂の上のホテルと呼ぶにふさわしい。また、プリンス(H13)の立地する周辺も小高い丘で、アプローチとなる道路も少ない上に坂となっていることから、裏町色の濃い一帯であった。

照屋の黒人街にあって、こうした遊興に特化した業種にくわえて重要なのが、「紳士服仕立」などとして分類される縫製・物販の洋服店(tailor)である。事業所名を確認できたものだけでも50件にのぼる。くわえて製靴・小売りをする靴店も13件を数えた。

黒人はとにかくオシャレが好きで、ファッションへの関心も高かったようだ——「とりわけコザ市照屋区の黒人街では、四、五軒ごとに洋服屋が一つずつあるというほど、大うけにうけている。黒人はおしゃれにかけては白人以上でたえず背広やズボンを新調している」(『琉球新報』1961年1月9日)。それらテーラーは「黒人街」の中心部、東西に延びる沿道にリニア状の集積をみてとることができる。

ファッションという点では、理容店の存在も見落とすことはできない。地区内にある理容店19件のうち10件までもが、外国人を顧客としており、バーやクラブのあいだに散点立地している。髪型にもこだわる彼らなのであった。なお、米兵を顧客とする理容店の理容師は、そのほとんどが女性である。

## V. 生きられた空間へ

### —残された課題—

(U) ブッシュは、オールドコザ、字照屋など様々な名称で呼ばれ、沖縄の人種問題のある地域として最も広く知られている。島における他のエリアの名前は一般にバーやレストラン、小売店などを連想させるだろうが、ブッシュとは商業的な区分けではなく、人種の境界を明確にするエリアを示す。… [略] …かつて、本島全域から黒人兵がブッシュを安息地とし、週末や給料日などには黒人らが遠方からでも距離をいとわず、このエリアを目指してやって来た。それに加え、近接した施設の黒人兵はそこでしばしばアパートを借りることもある。その他のエリアとの唯一決定的な相違点は、ブッシュはすっかり黒人領であり、黒人らが自ら進んで隔離状態を構え (a product of self-imposed segregation by blacks)、ブッシュ内へと迷い込んだ白人なら大体は誰でも襲撃や強盗に遭遇するという環境である。

これは、『KOZA BUNKA BOX』(第10号、2014年)に収録された、「特別報告書 [U] 沖縄の基地外歓楽街における人種的緊張 (SPECIAL REPORT [U] RACIAL TENSIONS IN OFF-BASE BAR AREAS ON OKINAWA)」と題する米空軍旧機密文書(1972年)からの引用である<sup>18)</sup>。「問題地区 (THE TROUBLED AREAS)」という項目の冒頭、照屋「黒人街」は「ブッシュ (THE BUSH)」として紹介されている。

一般にブッシュは灌木の茂みや未開の奥地などを指す語であるものの、黒人自らが進ん

で実践した空間分化の所産 (a product of self-imposed segregation by blacks) であるところの「歓楽街 (Bar Area)」を称して「ブッシュ」と呼ばれていたことがわかる。管見の限り、地区名称としての用例は地元紙の記事にも見あたらない。

上記「特別報告書」には、「ブッシュ」に関する興味ぶかい記述がいくつも見られる。たとえば、「特定した食べ物や服装の種類、音楽、そして態度などを含意した黒人のライフスタイルがそこでは受け入れられ、そこでは黒人が気楽にくつろげる環境が提供され続けていた」、あるいは「理髪店、美容院などはアフロ-ヘアを専門的に扱うが、決して排他的ではない」、「仕立屋は、黒人の間で人気の服装スタイルを扱う特色を売り物とし、しばしば他の所で探せる洋服より奇抜かつ派手なルックのものが入手できる」など、「黒人のライフスタイルに迎合」する商業の実態の一端をうかがい知ることができる<sup>19)</sup>。

また、「ブッシュ」では思想・信条や主義をともしする集団が組織化されていた。代表的な存在であった「ブッシュマスターズ」は軍道13号線に面したバー「777」(第2図 [A32])を拠点としつつ、ホテル「ハマベ」(第2図 [H11])にも頻繁に出入りしたほか、対抗関係にあった「ブラックホークス」は「777」の3軒となりのバー「ギンザ」(第2図 [A29])を根城に活動していたという<sup>20)</sup>。

IVで検討したように、「黒人街」を構成する主要な商業機能は、バーやホテルといった風俗営業にくわえ、洋裁店・製靴店、そして理容店と、ファッションに関わる店舗であった。復原した店舗立地(第2図)は照屋「黒人街」の記録として、またその空間性を考察

する手立てとして少なからず意義はあるものと思われるが、本稿は文化・社会地理学で主張されてきた「生きられた空間」を叙述するにはいたっていない。上記のような記録や語りを集めて再現することも課題のひとつとなるだろう。

くわえて、歓楽街としての照屋にはつきものの事件・事故、コザ反米騒動（1970年12月20日）につづく1971年8月16日の騒動とその前後の「ブラック・パワー」運動などもあわせて考察する必要がある。いずれも、今後の課題としなければならない。

〔付記〕本稿は、2016年人文地理学会大会（於：京都大学）で発表した内容をまとめたものです。本稿をまとめるにあたり、沖縄市役所総務部総務課市史編集担当の皆さまには、たいへんお世話になりました。記して謝意を表します。本研究はJSPS 科研費17K03264の助成を受けたものです。

## 注

- 1) 平岡正明『日本じゃず者伝説』、平凡社、257。文中の「Aサイン」とは、米軍によって軍人・軍属の入店に関して許可を受けたサーヴィス業（主として風俗営業系飲食店）を指す。店内に証票を掲示したほか、「APPROVED」（許可）の頭文字Aを看板にした店舗も見られた。
- 2) ノックス, P、ピンチ, S. (川口太郎ほか訳) (2005)『新版 都市社会地理学』、古今書院、1。
- 3) ラバン, J. (高島平吾訳) (1991)『住むための都市』、晶文社、260-261。
- 4) パーク, R.ほか (大道安次郎・倉田和四生訳) (1972)『都市——人間生態学とコミュニティ論——』、鹿島出版会。エンゲルス, F. (浜林正夫訳) (2000)『イギリスにおける労働者階級の状態 (上・下)』、新日本出版社。
- 5) 例として、以下の二つの文献を参照されたい。水内俊雄 (2004)「都市インナーリングをめぐる

社会地理」、水内俊雄編『空間の社会地理』、朝倉書店、23-58。桐村喬 (2013)「居住地域構造との関係からみた東京23区における国籍別外国人集住地区の社会経済的特徴」、人文地理、65(1)、29-46。

- 6) 加藤政洋 (2017)「基地都市コザにおける歓楽街『センター通り』の商業環境—1970年「事業所基本調査」の分析から—」、立命館文学、649、134-161。加藤政洋 (2018)「基地都市コザにおける門前商店街「ゲート通り」の店舗構成とその特色」、立命館文学、656、236-254。
- 7) (著者名無記) (1970)「コザ市照屋区『黒人街』略図」、週刊アンボ、10、20。
- 8) 沖縄住宅地図出版社・内山一三編 (1970)『ゼンリンの住宅地図コザ市・嘉手納村』、沖縄住宅地図出版社。
- 9) 沖縄慶文社 (1968)『コザ市 (美里) 住宅地図』、沖縄慶文社 [沖縄市役所総務部総務課市史編集担当所蔵]。善隣出版社沖縄支社編 (1976)『ゼンリンの住宅地図 沖縄市・北谷村 昭和51年版』、善隣出版社沖縄支社。
- 10) 沖縄風土記刊行会編 (1968)『沖縄風土記全集 第三巻 コザ市編』、沖縄風土記刊行会、75。
- 11) 著者不明『コザ 照屋1965』、66 (沖縄市役所総務部総務課市史編集担当所蔵)。
- 12) 加藤政洋 (2011)『那覇 戦後の都市復興と歓楽街』、フォレスト。
- 13) なお、照屋の周辺をも含めた地域形成の詳細については、次の文献を参照されたい。廣山洋一 (2007)「コザ十字路一帯における黒の街と白の街」、KOZA BUNKA BOX、3、58-81。
- 14) 前掲10)。
- 15) 平良竜次・當間早志 (NPO 法人シネマラボ 突貫小僧) (2014)『沖縄まぼろし映画館』、ボーダーインク、115-121。
- 16) 前掲11)、16。
- 17) 加藤政洋 (2017)「基地都市コザにおける宿泊業の立地展開—ヴェトナム戦争期を中心に—」、立命館文学、650、27-41。
- 18) 「英文資料からみる KOZA」、KOZA BUNKA BOX、10、26-68。引用は58頁から。資料の詳細については、政治地理学者の山崎孝史による解題を参照されたい。
- 19) 前掲18)、56、58。
- 20) 前掲18)、52、54。